
 学 会 記 事

第 56 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 17 年 12 月 10 日 (土)
午後 3 時～5 時 9 分
場 所 新潟グランドホテル 5 階
常磐の間

I. 一 般 演 題

1 術前診断が困難であった腸間膜脂肪織炎の 1 例

石由 貴子・瀧井 康公・桑原 明史
中川 悟・藪崎 裕・土屋 嘉昭
佐藤 信昭・梨本 篤・佐野 宗明
田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

術後病理で腸間膜脂肪織炎の診断を得た一例を報告する。

症例は 60 歳男性、右下腹部痛で近医受診し CT で横行結腸に腫瘤を指摘された。入院時、右下腹部に腫瘤を触知、血液検査で軽度貧血、CRP、sIL-2R の軽度上昇を認めた。腹部エコーで内部に石灰化を伴う腫瘤を認めた。注腸で横行結腸に狭窄像と鋸歯状陰影を認めた。CF で同部位の狭窄、粘膜表面の発赤・腫脹を認めた。CT で横行結腸の全周性壁肥厚と腫瘤を認めた。悪性リンパ腫の疑いで手術を施行。術中診断は小腸間膜リンパ腫であった。病理所見は肉眼で黄色腫瘤、顕微鏡で脂肪織壊死と炎症性細胞浸潤が見られ腸間膜脂肪織炎と診断された。本症は確定診断の決め手に乏しく術前診断の困難な疾患であった。

II. 主 題

1 当院における高齢者大腸がん検診の現況

船越 和博・井上 聡・新井 太
稲吉 潤・本山 展隆・秋山 修宏
加藤 俊幸

県立がんセンター新潟病院内科

【目的】超高齢化時代を反映し、大腸がん 2 次検診受診者は増加しており、内視鏡による 2 次検診を行っている当院の検診成績につき報告する。

【対象】2002-04 年の期間に住民検診・ドックでの便潜血陽性者に対して内視鏡検査を施行した高齢者 (76 歳以上) 189 名を対象とした。

【結果】1992-94 年に比し、高齢者 2 次検診受診者は 4.8 倍に増加し、男女比は 1.3:1 であった。がん発見率は 27.5% (早期がん比率 61.5%) と高く、性差はなかった。早期がんの左側結腸・直腸と右側結腸病変割合は 69:31、進行がんは 44:66 と進行がんで右側病変が増加した。同時多発例は 4.8%、異時多発例はなかった。多発腺腫からの早期がん発見率は 1.1% であった。

【結語】高齢者の 2 次検診でのがん発見率は高く、また深部結腸の進行がんの割合が増加することから、内視鏡による全結腸の観察は重要と考える。

2 高齢者の早期大腸癌—内視鏡的切除例を中心に

小林 正明・河内 裕介・塩路 和彦
合志 聡・横山 純二・竹内 学
佐々木俊哉・佐藤 祐一・杉村 一仁
成澤林太郎*・青柳 豊

新潟大学医歯学総合病院第三内科

同 光学医療診療部*

【背景】近年、大腸癌は生活習慣病として位置づけられ、中高年層では、左側大腸のポリープや大腸癌が増加している。一方、右側大腸癌は、脂質摂取量の少ない高齢者に多い。

【目的】高齢者大腸癌の早期発見、および病態の解明のため、高齢者早期大腸癌の臨床病理学的特